



星座ができた話

プラネタリウムでは毎日その日の夜に見られる「星空の話」をします。星空には月や惑星、そして星座を作る恒星たちが輝いています。今日は星座の成り立ちについてお話ししましょう。

星座はメソポタミア地方（今のイラクのあたり）の「羊飼ひ」が夜通し羊の番をする時に作ったものだと言われています。この「羊飼ひ」の名前は分かっていませんから、この物語の真偽も定かではありません。（多分作り話でしよ

う。）でも、徹夜で星を眺めた「羊飼ひ」はたくさんいたでしょうし、星を結んで何かの形を想像した「羊飼ひ」もいたことでしょう。だからこの物語は、少し高い見地から「本当の話」として取り扱うことが多いようです。

どうして、「メソポタミア地方」の羊飼ひなのでしょう？ それは、この地方から出土する「粘土の板」や「境界石」と呼ばれる大きな石に刻まれた星座のような絵が、世界で最初の星座の絵だと考えられるのです。5000年ほど前のものと考えられています。このような絵が、エジプトやギリシャを経てローマに伝わる間に、暦や占いや神話と結びついてわれわれが知っている「西洋の星座」となりました。インドや東洋では全く違う星座が作られています。それはまた別の機会にお話ししましょう。



メソポタミアの境界石（大英博物館所蔵）
上の方には、太陽や月、中段には星座の原型と思われるサソリの姿が見られます。

かいせつじん たべいっし
(解説員：田部 一志)